

アキール文庫のイクバル学コレクションについて*

ムハンマド・アースィフ**

山根 聡*** (日本語訳・補)

Annotation of Books on Iqbal Studies in the Aqeel Collection

Muhammad ASIF

YAMANE So (Japanese Translation, Supplement)

The “Aqeel Collection” at Kyoto University, one of the largest collections of Urdu books and magazines regarding South Asian studies in the world, was founded by the prominent scholar Dr. Moinuddin Aqeel (Mu‘īn al-Dīn ‘Aqīl). This collection consists of books of various fields such as Urdu literature, history, and social science. Since Dr. ‘Aqeel’s interest was focused on the Muslims’ political and social movements in South Asia, this collection has plenty of books in this field. That is why this collection has more than 1,100 books on the works of Muhammad Iqbal (Muḥammad Iqbāl, 1877–1938), who is regarded a “Poet of the East (Shā‘ir-e Mashriq)” and the spiritual founder of Pakistan, as Iqbal expressed the idea of the autonomous control of Muslims in South Asia in 1940. In Pakistan, Iqbal studies is called “Iqbāliyat” and several institutions of Iqbal studies have been publishing books and magazines and in universities there is a course curriculum of “Iqbāliyat”, so many books on Iqbal have been published in Pakistan. Among those innumerable books, the Aqeel Collection has some rare and high quality books on Iqbal.

This annotation focuses on such books as basic or rare books on Iqbal Studies, for example the list of books and papers on Iqbal, “Encyclopedia of Iqbāliyat,” essential books on Iqbal’s life and works, or books written by some important figures such as Javed Iqbal, Iqbal’s son or ‘Alī Shari‘atī. This annotation also introduces some books on Iqbaliyat which were recently published and showed some new dimensions on Iqbal Studies.

「アキール文庫」(京都大学)は、文学、社会学、歴史等のあらゆる分野に関し、ウルドゥー語や英語の書籍が25,000点以上収蔵されている。そのなかに、パキスタンの建国詩人で「大学者‘allāma」の尊称を得た詩人ムハンマド・イクバル (Muḥammad Iqbāl, 1877–1938)を研究する学問分野、「イクバル学 (Iqbāliyat)」のコーナーがあり、そこには約1,100点以上の書籍や雑誌が含まれている。これらの書籍は、イクバルの人物像、伝記、思想、文学的な技巧、イクバルの散文、韻文の著作等、あらゆる分野のものがある。

ムハンマド・イクバルは1877年にパンジャブとカシュミールの間位置するスィヤールコートという町に生まれた。中等教育までをスィヤールコートに学んだ後、1897年にラーホルのガヴァメント・カレッジで英文学とアラビア語を学び学士号を得た。1899年に同大学より修士号を得たのち、パンジャブ大学オリエンタル・カレッジでアラビア語の教員として教鞭を執ることとなった。イクバルはガヴァメント・カレッジで哲学を教えていたトーマス・アーノルド教授の影

* 本稿は、科学研究費プロジェクト「南アジア諸語イスラーム文献の出版・伝播に関する総合的研究」の研究成果の一部である。

** バハーウッディーン・ザカリヤー大学 (パキスタン・ムルターン)

*** 大阪大学大学院言語文化研究科教授

響を受け、1906年に渡英、ケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジで学士号を得たのち、渡独し、ミュンヘン大学より論文「ペルシアにおける形而上学の発展」で哲学での博士号を取得した。ドイツ滞在時代はハイデルベルグにも住み、ここでニーチェの著作などに触れながら、ペルシア語での詩作を行っている。1908年にはロンドンに戻り、リンカーズ・インで弁護士の資格を取得した。

1908年に帰国後はパンジャブ大学オリエンタル・カレッジで英文学と哲学の教員となった。その後一時的に弁護士業にも携わったが、19世紀末にラーホールで結成された「イスラーム擁護協会 Anjuman-e Hīmāyat-e Islām」に参画、文学活動に専念するようになるとともに政治活動にも携わることとなった。イクバルはペルシア語、ウルドゥー語での詩作にみられる詩想における自我の実現によって特に知られるが、1934年にオクスフォード大学出版局から刊行された講演集『イスラーム宗教思想の再構築 *The Reconstruction of Religious Thoughts in Islam*』のように、散文によっても政治や宗教に関するイスラームの近代主義的性格を披歴している。ペルシア語詩集には『自我の秘密』(1915年)、『滅私の秘儀』(1918年)、『ペルシアの詩篇』(1924年)、『永遠の書』(1932年)がある。ウルドゥー語詩集には『隊商の旅立ちの鈴の音』(1924年)、『ガブリエルの翼』(1935年)、『モーセの一撃』(1936年)、『ヒジャーズの贈り物』(1938年)がある。

イクバルは1926年にパンジャブ州立法議員となったが、彼の政治運動の流れの中でとくに有名にしたのが、1930年のアラーハーバードにおける全インド・ムスリム連盟の年次大会議長としての演説の際に、ムスリムによる自治構想(北西インド・ムスリム国家構想)を提示したことである。この演説に対して、発表当時の反応は決して大きなものではなかったが、1930年代後半にインド国民会議派とムスリム連盟の政治的対立が鮮明化した。没する1年前の1937年、イクバルはムスリム連盟のムハンマド・アリー・ジンナーに対し、ムスリム連盟を大衆政党として再建し、インド・ムスリムによる単一連邦国家樹立を訴えていた。その結果として、1940年3月23日にムスリム連盟がラーホール市で開催された年次大会でムスリムの単独独立国家「パキスタン」樹立の構想を採択した(ラーホール決議)ことにより、1947年の印パ分離独立に至った経緯において、パキスタン独立構想の源泉をイクバルの演説に求める主張がパキスタンでは主流となっていった。イクバルはパキスタンの独立やラーホール決議を目にすることなく、1938年に没しているが、イクバルはパキスタンの国民的詩人と称えられ、テレビや新聞では連日のようにその詩句が紹介されている。したがって、パキスタンでは「イクバル学」が学問分野として成立し、大学院等の授業でもこれが独立した授業として教授されている。現在もなお、国立のイクバル学研究機関(Bazm-e Iqbāl)がラーホールにあり、様々な研究セミナーや国際会議、研究雑誌の刊行等が行われている。アキール文庫は、こうしたイクバル学関連の膨大な刊行物の中から1,100点以上の書籍を所蔵しているが、ここで特徴的なのは、イクバル研究を「お家芸」とするパキスタンのみならず、インドで刊行された研究書も含んでいる点である。

本文庫のイクバル学コレクションには、一人の研究者によるイクバル学に関する著作もあれば、一人の著者による論文集、あるいは複数の著者による論文が編集された書籍も収められている。これら書籍の多くは初版か、古い時期の版である。そのほとんどがインドやパキスタンで刊行された公的、私的な刊行物だが、現在入手不能であったり、きわめて珍しい書籍なども含まれている。さらに、アキール文庫に所蔵されている書籍にはイクバル学に関する基本文献も網羅されていることから、アキール文庫のイクバル学コレクションは、日本にいながらにしてイクバル研究が成立できるほど充実したものになっている。

パキスタンにおけるイクバル研究の特徴は、イクバルの思想がパキスタン建国理念やイスラーム復興の文脈で解説される場合が多い点にある。このため、イクバルは常にパキスタンのムスリム社会における理想的教訓をもたらす存在として、あるいはイスラーム世界における思想面での指導者としての評価の中で語られてきた。実際、イランではイクバルのペルシア詩は高く評価され、アリー・シャリアティー（‘Alī Shari‘atī, 1933–77）もイクバルの思想に感化されたとき、イランでは「イクバル・ラーホーリー Iqbāl Lāhorī（ラーホール出身のイクバル）」として、現代ペルシア詩人としての尊敬を集めている。だが、イクバルの詩作には、社会主義や社会主義革命を評価する作品など、彼自身の思想的変遷とともに、その詩作の主題も様なものに収まっていないことは明らかである。イクバルのこうしたイスラーム復興やパキスタンの建国理念と矛盾するような詩作について、パキスタンでは多く語られることがなく、そうした研究書や著作は高い評価を受けることがなかった。

アキール文庫のイクバル学コレクションの特徴は、こうしたイクバル学でもその内容が一般のイクバル学研究書と異なる内容の著作も網羅的に収集している点で非常に重要である。本文庫によって、イクバルに対する様々な評価が俯瞰できることとなっている。

小文では、数ある文献の中から、いくつかについて紹介するが、解題を作成するにあたり、まずはイクバル学を学ぶ研究者にとって有益な文献を紹介することとした。また、こうした文献に加えて、イクバル学創成期の文献や、その後刊行された研究書の他に、最新の研究成果を含めるように務めた。こうして選択した文献には、イクバルの生涯、思想、文学的技法に関する書籍が含まれることになる。また、イクバル学の関連文献リストも含めることとした。イクバルの作品自体については、散文作品についての解題を付した。なぜなら、イクバル学においては、韻文作品に関する研究に関心が集まっており、イクバル学を始める者の多くが韻文作品の研究に集中しがちで、散文作品に対する関心が失われがちであるからである。だが、イクバルの詩想や思想、哲学を完全に理解するためには彼の書簡、論文、演説、発言を研究することがきわめて重要であるためである。また、散文作品は、イクバルの詩作や詩想を理解する上で大変役立つものなのである。本解題には、イクバルの論文、エッセイ、演説、発言集や書簡の一部をまとめた散文集を紹介する。

なお、イクバルの著作の日本語訳には、単行本として、片岡弘次訳 2011『ジブリールの翼』大同生命国際文化基金「アジアの現代文芸 PAKISTAN 9」、片岡弘次訳『隊商の旅立ちを告げる銅鑼の音——イクバル詩集』花神社、があり、雑誌に掲載された翻訳では、松村耕光訳 1984「イクバル・ウルドゥー詩集(1)」『大阪外国語大学学報』64号、松村耕光訳 1984「イクバル『ムスリムの生活について』」『大阪外国語大学学報』67号、松村耕光訳 1984「イクバルの四行詩(1)」『外国語・外国文学研究』8号、松村耕光訳 1985「イクバルの四行詩(2)」『外国語・外国文学研究』9号、松村耕光訳 2009「旅するヒズル——イクバルのウルドゥー詩(1)」『イスラーム世界研究』第2巻第2号 pp. 219–226、松村耕光 2009「悪魔の評議会——イクバルのウルドゥー詩(2)」『イスラーム世界研究』第3巻第1号 pp. 442–447、松村耕光 2010「コルドバのモスク——イクバルのウルドゥー詩(3)」『イスラーム世界研究』第3巻第2号 pp. 372–377、松村耕光訳 2011「サーキー・ナーマーイクバルのウルドゥー詩(4)」『イスラーム世界研究』第4巻1–2号 pp. 476–482、松村耕光訳 2012「不満——イクバルのウルドゥー詩(5)」『イスラーム世界研究』第5巻1–2号 pp. 357–364、松村耕光訳 2013「不満への回答——イクバルのウルドゥー詩(6)」『イスラーム世界研究』第6巻 pp. 540–548、松村耕光訳 2014「イスラームの夜明け——イクバルのウルドゥー詩(7)」『イスラーム

ム世界研究』第7巻 pp.493-498、松村耕光訳 2015「蠟燭と詩人——イクバルのウルドゥー詩(8)」『イスラーム世界研究』第8巻 pp.259-265、などがある。

Rafī al-Dīn Hāshimī, 1981, *Iqbal kī Tavīl Nazmēn, Fikrī aur Fannī Muṭāl'a*. Lahore: Sang-e Meel Publications.

(AQEEL|D|104|5)

書名からも明らかなように、本書にはイクバルの長編詩の思想的、技巧的な研究がなされている。本書に収載されている長編詩は、「不平」、「不平への答え」、「燈明と詩人」、「亡き母の思い出に」、「道案内人ヒズル(ヒドル)」、「イスラームの曙」、「趣向と趣味」、「コルドバのモスク」、「酌人の書」、「イブリースの集会」である。イクバルの詩の注釈書は容易に入手できるが、こうした注釈は詩作に関する批評を完全に満たすことはできていない。本書はこうした不備を満たしてくれる書籍である。イクバルを学ぶ者にとって、彼の長編詩を研究することは不可避であるが、これらの詩作に込められている繊細な詩想や象徴を理解することは極めて難しいものである。本書は、各詩の紹介とともに歴史的背景、思想研究、技巧に関する研究が述べられていて、各詩で述べられている出来事の詳細と技巧的な繊細さを明らかにしているのである。著者は、本書の目的として学生が理解できるように書いたと述べているために、研究書でありながら、注釈の部分が強調されているのである。著者ハーシュミー氏がイクバル学の権威であることから、すべての詩作に対し、イクバル学のあらゆる知見を駆使して紹介している点で、イクバルの長編詩の理解において、本書は独自の意義を持っている。イクバル学を学ぶ者にとって重要な書籍であり、イクバルの詩作の注釈書のなかでこれだけ人気の高い著作はない。

‘Āshiq Husain Baṭālvī, 1961, *Iqbal ke Akhīrī Do Sāl*. Karachi: Iqbal Academy. (AQEEL|D|104|14)

著者アーシク・フサイン・バタールヴィーはイクバルの最晩年期の1936年から38年にかけて、パンジャープのムスリム連盟の副書記長を務めていた人物で当時ムハンマド・イクバルは議長であった。したがって本書は、著者自身が見た出来事に基づいた記録で、このような著者だからこそ書いたものであった。こうしたイクバルの同時代の人物による伝記は、それまで誰も書いたことのないものであり、その後のイクバル研究者が、イクバルの政治活動に関して研究する場合まず基本文献として用いるのが本書である。本書は、イクバルの詩的、精神的な部分でなく、政治的な側面を描いている。イクバルの最晩年の2年間を研究する上で、この時代そのものがかかるといえる時代であったかということを理解することは欠かせない。そこで本書の内容は2つに大別される。最初の部分は歴史的背景が描かれており、イクバルにとっての最晩年期がどのように形成され、ムハンマド・アリー・ジンナーとの間での志向が同調していく過程が判明するようになっている。残りの部分は、イクバルが最晩年期に、パンジャープのムスリム連盟をいかに発展させようと尽力し、ジンナーを成功に導かせるために助力したかが述べられている。このように、本書はイクバル学のみならず、政治史、パキスタン学、南アジア現代史を理解する上でも重要な資料となっている。イクバルは一般的に、自らは実践的な活動をしない人物であったとされ、動かない政治家、あるいは単なる詩人、哲学者、といった評価が下されることがあるが、バタールヴィーによる本書での記述によって、1926年から34年にかけて、南アジアのムスリムの政治活動においてイクバルが実践的な努力を行い、その後の病床に伏せた1936年から38年まで、また臨終の床で最期の息を引き取るまで(1938年)、ムスリム指導者たちに対し、インドとは別の国家を建設する提案を受け入れるように説得していた様子がわかるのである。体調がすぐれないにもかかわらず、

情熱と誠意をもって「偉大なる指導者」ムハンマド・アリー・ジンナーを支えていたのであった。本書が刊行されると、パンジャブの政界、学界である種の騒ぎが起こったのであった。なぜなら、本書によって、インド亜大陸の大土地所有層が抑圧していた貧困層の権利獲得のために、ムスリム連盟がいかにして台頭したかがわかるのである。また著者バタールヴィーは、イクバルやジンナーが目指していた社会建設のために、大土地所有者に反対する内容の著作を、いかに勇気をもって著したかが明らかとなるのである。本書は、イクバルの政治活動を知るうえで、またパキスタン独立期の特定の時代を知るうえで基本資料となるものである。

I'jāz al-Haq Qudsī, n.d., *Iqbāl aur 'Ulamā'e Pāk o Hind*. Lahore: Iqbal Academy. (AQEEL||B||901||207)

印パ亜大陸のウラマーのなかで、ムハンマド・イクバルにとって思想的に近い存在にあり、実際に親交のあったウラマーの生涯について述べたもので、彼らの研究は、イクバルの人物像を知るうえで貴重な情報を与えるものである。本書には31名のウラマーが挙げられていて、ウラマーの没年によって並べられ、それぞれの生涯や人物像についての紹介がなされている。本書の構成は、第1章が「印パ亜大陸のウラマーのムスリム民族としての役割」と題されて、その全体像についての概要が描かれ、次章が各人物に関する紹介となっている。ここに紹介されているのは、ムジャッディド・アリフ・サーニー、シャー・ワリーウッラー、シャー・イスマール・シャヒード、アッラーマ・ムハンマド・ジョーンプリー、シブリー・ヌウマニー、シャイフル・ヒンド・マウラーナー・マフムドゥル・ハサン、アフマド・ラザー・バレールヴィー、マウルヴィー・サイイド・ミール・ハサン、アブドゥル・マージド・バダーユニー、アヌワル・シャー・カシュミリー、シャー・スライマーン・パルワリー、ハビーブル・ラフマーン・ハーン・シェルワーニー、サイイド・スライマーン・ナドヴィー、マスウード・アールム・ナドヴィー、ハーフィズ・アスラム・ジラージプリー、マウラーナー・フサイン・アフマド・マダニー、マウラーナー・アブルカラム・アーザード、アブドゥル・マージド・ダルヤーバーディー、マウラーナー・アブツ・アラー・マウドゥーディーなどである。これらの人物を見れば、イクバルがいかに多くのウラマーたちの影響を受けていたかが明らかとなる。またそれぞれのウラマーがいかなる人物で、イクバルとの関係がそれぞれどの程度であったかがわかるのである。その一方で、亜大陸の著名かつ重要なウラマーたちのムスリムの政治もしくは宗教にとっての役割を検討する上でも、本書は貴重な情報を与えてくれるのである。

Akhtar Aurinvī, 1942, *Iqbāl*. Allahabad: Rām Nārāyan Lāl Book Seller. (AQEEL||D||101||22)

1942年までに、イクバルに関する重要な書籍は2点刊行されている。一つは Maulvī Ahmad Dīn による『イクバル *Iqbāl*』で、1926年に刊行された。もう一冊は Yūṣuf Ḥusain Khān による『イクバルの魂 *Ruh-e Iqbāl*』で、1942年に出版されたものである。両者は、イクバルを研究する上で最も重要な書籍である。だが、当時の学生のために書かれたイクバル関連の書籍というのは皆無に等しかった。1942年まで、学校教科書に採用されたイクバルの詩作の注釈や、学生向けのイクバルの人物や詩想に関する書籍は待った出版されていなかったのである。本書は、簡明かつ明快にイクバルの詩作の思想的、技巧的な側面について述べた最初の書籍であり、学生向けにイクバルの詩作の注釈を行った著作である点で非常に重要である。本書の刊行年がイクバルの没後4年目である点から、イクバルに対する関心がいかに高かったかを示しており、学校教育でイクバルの詩作の解釈がなされていたことがわかる。本書には11本のイクバルに関する概説

が掲載されているが、1942年の、記念すべき刊行物であると評価できる。

Mu'in al-Rahmān, Saiyid, 1977, *Jam'iyat men Iqbāl kā Tahqīqī o Tanqīdī Muqāl'a*. Lahore: Iqbal Academy Pakistan. (AQEEL||D||106||41)

本書は、世界の様々な大学において執筆されたイクバル学に関する研究論文に関する研究である。インド、パキスタン、アメリカ(ニューヨーク、シカゴ、カリフォルニア)、エジプト、ドイツ、バングラデシュ、日本、マレーシア(クアラルンプール)、イギリス(ロンドン)、ベルギー、フィンランド、スリランカ、トルコ、フィリピンなど、世界各地の大学で発表された博士論文、修士論文等のリストが記載されている。リストは大学名、著者名、分野名で分けられ、いくつかの論文に関してはその内容についての紹介が盛り込まれ、他の論文との比較もなされている。これらイクバル学の論文の分野は、ペルシア文学、ウルドゥー文学、アラビブ文学、政治学、イスラーム学、図書館学、教育学、経済学、歴史学などに及んでいる。巻末には文献の目次が付されている。本書は、1977年までに発表されたイクバル学の諸論文を参照する上で最も重要なリストである。イクバル学を研究する者にとって、世界での先行研究を知るうえでは必読書であり、イクバル学の工具としては必読文献である。

'Ali Sharī'atī, n.d., *Mā wa Iqbāl*. Tehran: Ḥasīna Arshad. (AQEEL||D||103||81)

アリー・シャリーアティー(1933-77)はイランの学者でイラン・イスラーム革命の道を固め、その人生を国内や国際的な植民地主義支配 *sāmraj* に反対し、思想的、実践的な両面で活動した人物であった。テヘランの Ḥasīna Arshad はイスラーム革命を広げる場として機能し、学者たちは自らの演説を大衆に伝えた。本書は書籍の体裁で刊行されたが、シャリーアティー自身の演説の中の一つであり、ペルシア語での刊行物である。シャリーアティーは、サイイド・クトゥブ、ムハンマド・クトゥブ、ムハンマド・イクバル、アール・アフマドらの影響を受けたとされている。本書は2つの部分に分けられており、現代の国際情勢の分析の中で、イクバルの思想の本質を明らかにしようとしている。シャリーアティーはイクバルを「アリーのような人物」と評し、イクバルの詩作はわれわれムスリムの詩作であり、彼の作品は、ムスリムの思想的な迷いや問題を解決するものである、としている。このためにイクバルは自らの思想を実現するべく、その生涯を捧げたと述べている。本書によって、イランにおけるイクバル研究は既に始まってはいたものの、シャリーアティーが革命期に自身の講演等でイクバルについて言及したことにより、イランでのイクバルへの関心が高まり、イクバルの名はより広く知られるようになったのである。本書はイランにおけるイクバルの評価、さらにはイクバルの国際的評価を知るうえで極めて貴重な資料である。

'Atīya Begam, Ziyā al-Dīn Aḥmad Barnī (ed.; trans.), 1969, *Iqbāl az 'Atīya Begam*. Karachi: Iqbal Academy. (AQEEL||D||106||20)

イクバルの妻アティヤ・ベーガムの英語の著作『イクバル』は1947年にムンバイから刊行された。同書には、アティヤ宛のイクバルの書簡やメモのコピーや、イクバルのヨーロッパ留学時のアティヤ・ベーガムの日記等が含まれている。本書は、この英語の図書のウルドゥー語訳で、ズィヤーウッディーン・アフマド・バルニーが翻訳したものである。本書には、1905年から08年までのイクバルのヨーロッパ滞在期に関するアティヤの記録や、1907年4月10日から同年12

月4日までの彼女の日記、イクバルがアティヤ宛に送った書簡が掲載されている。中には、イクバルがアティヤに送った詩のコピーも掲載されている。また巻頭には翻訳者による序文が、巻末にも翻訳者による解説「ある忘れられた愛」が付されている。イクバルの没後発行された本書によって、ヨーロッパ留学時期のイクバルの生活、当時精神的に悩みを抱えていたイクバルの様子やアティヤとの関係など、その後のイクバルの創作や思想を理解する上で貴重な資料であり、特にイクバルの心理を研究する上で最初の図書と評価されており、一人の人間、一人の男性としてのイクバル像が本書によって浮き彫りとなる。

Jahāngīr ‘Ālam (trans. ed.) 1977, *Iqbāl ke Khuṭūṭ Jinhā ke Nām*. Lahore: Universal Books. (AQEEL||D||105||27)

イクバルの没(1938年)後1943年に「偉大な指導者」、ムハンマド・アリー・ジンナーが自身に宛てたイクバルの13通の英語の書簡を、自らの英語の序文とともにラーホールの出版社シャイフ・アシュラフから刊行させたものである。ジンナーは本書でこれらの書簡の重要性について述べるとともに、イクバルの政治思想を高く評価している。ファイサラーバード大学の歴史学、パキスタン研究の研究者であったジャハーンギール・アラムが、ジンナー宛のイクバルの書簡をさらに発見し計16通の書簡をウルドゥー語に翻訳し、1977年に刊行させたものである。本書に収載された書簡によって、イクバルとジンナーの親密な関係を知ることができるとともに、両者が思想的に同調していたことが明らかとなる。書簡の中でも、1936年から38年までに書かれたものがあるが、この時期は亜大陸においてイスラムの将来について極めて繊細な時であり、イクバルがジンナーの政治活動に対して行った助言等が含まれており、このことをジンナー自身も序文で述べている。これらの書簡は、1930年のアラーハーバードでのイスラム連盟の年次大会の内容とつながるもので、亜大陸における法的な問題、イスラム連盟の改革、アジアのイスラムの将来、亜大陸におけるイスラムの固有の国家建設、パキスタン運動の背景となる動き、インド国民会議派の対応、新国家建設のための経済的な問題の重要性など、これらの書簡が、亜大陸における新国家建設に向けたイスラムの努力、政治状況、その心理状況等を理解する上で重要な資料である。

‘Abd al-Ghaffār Shakīl (ed.), 1977, *Iqbāl ke Nathrī Afkār*, Delhi: Anjuman Taraqqī Urdū Hind. (AQEEL||D||105||29)

ムハンマド・イクバルは自身の思想を詩作のみならず、演説、書簡、論文等で示してきた。これにより、自らの哲学的、創造的な面を示してきたのであった。イクバルの全体像を知るうえで、韻文作品のみならず、散文の解説も重要であることは明らかである。だが、ウルドゥー文学界は、イクバルの散文に対し多くの関心を払ってこなかった。イクバルの散文には、児童への教育やしつけに関する見解、ウルドゥー語に関する論考、自身のペルシア語詩集の序文、論文「イスラムの生活について」(イクバル 松村耕光訳1984「イスラムの生活について」大阪外国語大学論集67号)、ペルシア語詩集『自我の秘密』に対する批判への回答、預言者の文学的意義、宗教と政治、新年のメッセージ、イスラームと民族主義、カリフ制、画家チュグターイーのイクバルの詩のイメージで描かれた画集の序文、イスラーム研究の重要性等がある。これら散文は、イクバルの詩作を理解する上で重要な情報を与えるものである。本書はこうしたイクバルの散文33点を含めたもので、執筆された時代順に収載されている。各散文の冒頭には初出刊行年、その重要性、背景や主題に関する概説が付されている。本書は、イクバルの散文がまとめられた最初の書

籍であり、イクバル研究の基本文献である。

Iqbal Aḥmad Ṣiddiqī (trans.) 1999, *Iqbāl: Taqrīren, Tahrīren, aur Bayānāt*. Lahore: Iqbal Academy Pakistan. (AQEEL||D||107||20)

本書は、ムハンマド・イクバルの散文集で、最初はラティーフ・アフマド・シェルワーニーが「シャームルー Shāmlū」のペンネームで1944年に英語でラーホールから刊行させたものである。同書を、シェルワーニー自身がウルドゥー語に翻訳し、1965年にラーホールから刊行させたのである。本書は初版刊行後、1947年、1955年、1961年に版を重ねてきていた。パキスタンの有名なジャーナリストで翻訳家でもあるイクバル・アフマド・スィッディーキーが同書を再びウルドゥー語に翻訳し、それまでの版の間違いや不備を修正させた。本書の訳文はこなれた簡明な文章であり、インド法廷委員会(サイモン委員会)任命に対するムスリム連盟によるボイコット決議(1927年)、イクバルによるムスリム連盟アラーハーバード年次大会での演説(1930年)、全インド・ムスリム会議の議長演説(1932年)に関する演説のほか、「倫理的・政治的概念としてのイスラーム」、「イスラームにおける政治思想」、「イスラームとスーフイズム」、「ニーチェとルーミー」、「東洋における女性の地位」、「イスラームとアフマディー教団」、「アフマディー教団に関するジャワーハルラール・ネルーに対する書簡」(1936年)、新年のメッセージ、イスラームと民族市議に関するフサイン・アフマド・マダニーの発言に対する反論(1938年)など、様々な新聞やラジオ番組で発表された演説や発言が含まれており、イクバルを研究する上で重要な散文が収められている書籍である。

Aḥmad Sa'īd, n.d., *Iqbāl aur Qā'id A'zam*. Lahore: Iqbal Academy Pakistan. (AQEEL||D||121||10)

本書の著者アフマド・サイイド教授はムハンマド・イクバルとムハンマド・アリー・ジンナーの関係を研究し、その対立や同調を、パキスタン運動の背景として考察した。そこで、本書の第1章の「対立」には、デリー・ムスリム提議、分離選挙、サイモン委員会、ネルー報告書までの議論を扱っている。第2章「思想における同調」においては、インドの分離、北西辺境州に関する議論、白書、西洋の民主主義、パレスチナ問題、パンジャブとベンガルのムスリム多数派に関する議論を通じて、両者の同調する過程が考察されている。第3章「対立の終わり」ではジンナーとイクバルの書簡の分析によって、両者の思想を考察している。巻末にはジンナー宛のイクバルの書簡、イクバルのジンナーに対するイメージ、イクバルの死に対するジンナーの発言等が収載されている。このように、本書はイクバルとジンナーの関係を時系列で検討しており、両者の思想的変遷を通して、パキスタン建国までの歴史を著述している。さらに、巻末の資料集は、イクバルが当時の政治家や運動家たちにとっていかなる存在であったかが明らかとなる。この点で本書はイクバル学のみならず、歴史学、政治学、パキスタン研究にとっても基本情報を与えるものである。

Jāved Iqbāl, 1979, *Zinda Rūd (Ḥayāt-e Iqbāl kā Tashkīlī Daur)*. Lahore: Shaikh Ghulām 'Alī and Sons. (AQEEL||D||102||8)

Jāved Iqbāl, 1984, *Zinda Rūd (Ḥayāt-e Iqbāl kā Wasfī Daur)*. Lahore: Shaikh Ghulām 'Alī and Sons. (AQEEL||D||102||9)

Jāved Iqbāl, 1984, *Zinda Rūd (Ḥayāt-e Iqbāl kā Ikhtatāmī Daur)*. Lahore: Shaikh Ghulām 'Alī and Sons.

(AQEEL||D||102||10)

本書全3巻は、イクバルの生涯について息子のジャーヴェード・イクバル(2015年没)が著したものである。ムハンマド・イクバルは生涯を描くことについて、個人的生活を描くことよりも、個人の思想的発展を描くことに意義があると考えていた。すなわち、イクバルにとって彼の生涯を描くということは、彼自身の思想的変遷を描くことであった。本書の刊行以前、イクバルの生涯に関する詳細を記述した書籍はなかった。本書において、イクバルの息子であるジャーヴェード・イクバルは父イクバルの私生活を通して、彼の思想の変化を描いた。著者はイクバルの生涯を3つの時代に分類した。最初の時代はイクバルという人物が確立されるまでの時代で、19世紀以降のイスラーム復興の流れの中で1877年のイクバルの誕生を描き、彼の教育が完了する1908年の留学終了までを設定している。次の時代は中期として、1908年から1925年までの時期を区切っている。この時期のイクバルの思想的発展を描き、第3の時代は、イクバルの晩年に至るまでの時期を設定している。第3期はイクバルが実際に政治活動を開始した時期で、1926年から亡くなった1938年4月までが描かれている。本書で著者は、きわめて主観的にイクバルの生涯を描いている。本書以外に、イクバルの私生活をここまで詳細に描いた文献はなく、イクバル研究で本書は必読書となっている。イクバルの思想を知るうえで重要なだけでなく、他の文献にみられないイクバルの姿が本書に描出されている点でも貴重である。

Deptt. of Iqbalīyāt, Oriental College, Punjab University (ed.), 2006, *Dā'ira-e Ma'ārif-e Iqbāl*, vol. 1. Lahore: Punjab University. (AQEEL||B||903||2)

Deptt. of Iqbalīyāt, Oriental College, Punjab University (ed.), 2010, *Dā'ira-e Ma'ārif-e Iqbāl*, vol. 2. Lahore: Punjab University. (AQEEL||B||903||3)

本書2巻は『イクバル学百科事典』として編纂されたものである。第1巻はウルドゥー語のアルファベットで alif から the まで、第2巻は jīm から zo'e までの項目を収載している。たとえば、alif の項目では、アーダム (ādam)、芸術 (art)、アーノルド (Arnold)、独立 (āzādī) といった、イクバル研究に必要な項目が並べられている。これにより、イクバル研究に必要なあらゆる情報がここに収録されている点で、イクバル研究において基本文献の一つである。本書の刊行については、パンジャブ大学イクバル学部のサイド・アクラム・イクラム教授が発案したものである。同様の書籍は、1977年にマリク・ハサン・アフタル教授によって刊行されている (AQEEL||D||121||37)。

Malik Hasan Akhtar, 1977, *Dā'ira-e Ma'ārif-e Iqbāl*. Lahore: Maktaba-e 'Āliya. (AQEEL||D||121||37)

本書はイクバル学の百科事典で、ウルドゥー語のアルファベット順に、イクバルに関連した項目を並べたものである。イクバル学を学ぶ者のために、重要な情報を、出来る限り簡明な解説で記されている。本書はイクバル学最初の百科事典であり、一人の研究者が記した著作である。その後、(AQEEL||B||903||2,3)のようにパンジャブ大学が複数の研究者の協力のもとでイクバル学百科事典を編纂したことにより、個人の執筆による本書は項目数などで劣る部分があるものの、イクバル学における一つの到達点として評価すべき書籍である。

Muḥammad Uthmān, 1975, *Ḥayāt-e Iqbāl kā Ek Jazbātī Daur aur Dūsre Mazāmin*. Lahore: Maktaba-e Jadīd. (AQEEL||D||103||24)

5つの章からなる本書には、著者の14本の論文が収録されている。第1章「初期」には「青年詩人イクバル」、第2章「経済」には「イクバルと経済的問題」「イクバルとロシア」「イクバルと社会主義」などが収められている。第3章「社会」には「クルアーンの法的地位」「イクバルの偉大な散文」「パキスタンの債権とイクバル」等が収録され、第4章には「自我の哲学の政治的背景」「イクバルの恋愛詩」「イクバルの思想について」などが含まれている。第5章は「イクバルの生涯における感情的な時代」が収められている。このように、イクバルに関する論文を集めたものでありながら、社会、経済、思想、パキスタン政治など、現代的な問題を通してイクバルを論じようとしている。著者はラーホールのガヴァメント・カレッジのウルドゥー文学研究科の教授を務めたのち、パキスタンの国立研究機関「イクバルの宴」の所長を歴任した人物である。本書での論考の中で、特に社会主義や経済に関する論考は、現代のムスリムにとっての経済の意味を問い直すものとしており、「イクバルの生涯における感情的な時代」において、イクバルの感情的な時代は人間が誰もが経験するものであるが、イクバルの経験は、後の詩作に少なからず影響を与えていることを示唆した。また、イクバルの散文については、その思想的展開を歴史的に検討した。これら論文はみな客観性に富み、イクバル研究において新たな視点を提供するものである。

Fath Muḥammad Malik, 2002, *Iqbāl kā Fikrī Nizām aur Pākistān kā Taṣawwūr*. Lahore: Sang-e Meel Publications. (AQEEL||D||102||14)

Fath Muḥammad Malik, 2002, *Iqbāl Farāmoshī*. Lahore: Sang-e Meel Publications. (AQEEL||D||102||2)

パキスタン国立国語アカデミーの会長やイスラマバードの国際イスラーム大学の教授を歴任したファテ・ムハンマド・マリクは、1995年にラーホールのサンゲミール出版社から『イクバル——思想と行動』を発表した。同書には8本の論文が含まれていて、イクバルの思想の他、イクバルとパキスタン構想、イクバルの宗教観、イクバルとパキスタン文化の再構築などを論じていた。また、作家サリーム・アフマドとの5本の書簡によるやり取りも収録されていた。(AQEEL||D||102||14)は、同書に、イクバルとネルー、イクバルとマウラーナー・マダニー、イクバルとアブル・カラーム・アザード等4本の論文を加えて、2002年に再版させたものである。また、(AQEEL||D||102||2)は、15本の論考からなる書籍で、イクバルの長編詩の解釈、イクバルとクルアーンとパキスタン、イクバルと今日のトルコ、イクバルとイスラーム世界の団結の現代的概念、イクバルと王制、民主制のイスラーム的概念などを含めている。この2冊の書籍は異なる論文を集めたものであるが、全てに共通するのは、パキスタンと念頭においてイクバルを検討するものであり、イクバルの革命的な思想がなぜパキスタン社会で実践されないのか、あるいはそもそも実践不能なのか、という問いを常に投げかけているのである。すなわち、パキスタン社会は、真の意味でイクバルの思想を理解できていないのではないか、という厳しく問いただし、パキスタン社会の再構築とイクバルの思想を結び付けようとしているのである。この2つの書籍は、現代とイクバルの思想を強く結びつける、示唆に富んだ著作である。

Ṣiddīq Jāved, 2003, *Iqbāl: Na ī Tafhīm*. Lahore: Sang-e Meel Publications. (AQEEL||D||111||40)

著者は、本書の内容そのものについて詳しく述べていないが、本書は著者の過去の著作(『ガブリエルの翼』の批評研究(1987年)、『イクバル研究』(1988年))に新たな論文を加えた、イクバル関連論文の全集である。今日までにイクバルに関する数多くの論文が発表され、もう研究

の余地はないかのように思われるが、著者はだからこそ、あえて署名を『イクバル——新たな理解』とした。イクバルにおける政治的、詩的な背景、イクバルの思想の文化的概念、イクバルにおける社会集団の概念——国家観、民族主義観、愛国観、社会主義観、国家独立に向けた運動——、イクバルとオリエンタリズム、タクリードとイジュティハード、女性観などを通して、イクバルの社会観を描こうとしている。このように、イクバルの思想を現代的なテーマに照らし合わせて再検討し、重要な指摘を行っている点で、本書はイクバル研究の新たな視点を提示している。著者はラーホールのガヴァメント・カレッジ英文学研究科で教鞭を執ってきた研究者である。

Kanīz Fātīma Yūsuf, 2005, *Iqbāl aur ‘Aṣrī Masā’il*. Lahore: Sang-e Meel Publications. (AQEEL||D||101||58)

本書が執筆された背景について著者は、パキスタンに住む人々は、かつて隷属下にあった時代にイクバルに学んだが、独立を勝ち取ると、イクバルの事を忘れてしまい、新しい世代はイクバルの詩を理解しようとしていない、という危機感を明らかにしている。さらには、現在のパキスタン社会では、パキスタン建国にイクバルの存在は必要なかった、という考えまでもが浸透しつつある。こうした考えに 대응する上で、著者は現代的な問題とイクバルの思想を比較検討している。著者は、現代パキスタンの政治家や社会の指導者のみならず、若者までが、パキスタンという国家の存在に甘んじ、明確なビジョンを持たずにいることに警鐘を鳴らし、今こそイクバルを学ぶ必要があると重ねて強調している。本書では、社会主義、イスラーム的国家観、グローバリズム、女性問題、学問のあり方、さらには9.11以降の世界における社会の在り方など、様々な12の課題からイクバルを検討することで、パキスタン社会の在り方を検討する上でのイクバルの必要性を説いている。著者のカニーズ・ファーティマ・ユースフはイスラマーバードのカーイデアーズム大学の学長を歴任した歴史学者で、パキスタン研究の専門家でもある。このため、本書の内容はパキスタン研究に主眼が置かれているが、こうした現代的な問題でイクバルを議論している著作の中での代表的な一冊である。

Mu‘īn al-Dīn ‘Aqīl, 2008, *Iqbāl aur Jadīd Duniyā-e Islām*. Lahore: Maktaba-e Ta‘mīr-e Insāniyat. (AQEEL||6)

本アキール文庫を作ったムーヌッディーン・アキール博士によるイクバル研究で、現代イスラーム世界が抱える問題、思想、運動の背景を、イクバルを通して論じている。その中で、ワッハーブ運動、シャー・ワリーウッラーの運動、アリーガル運動、ジャマルッディーン・アフガーニー、イスラーム連帯の動き、カリフ制を巡る問題、トルコの近代化、領土的ナショナリズムの問題、西洋化の問題、パレスチナ問題、社会主義の問題、さらにティーブー・スルターン、メヘディー・スダーニー、サイイド・ハリーム・パーシャー、ムフティー・アラム・ジャーン、アブル・アラー・マウドゥディーといったムスリム運動家、思想家、政治家らについて、イクバル研究の文脈で論じている。これにより、現代イスラーム世界を構成している背景に、いかなる歴史的事件や個人の影響が関わっているかが明らかとなってくる。こうして著者は、イクバル自身が、本書で示した思想家たちからいかなる影響を受けたかを考察したうえで、イクバルの思想の影響が南アジア以外の地域に及ぼされた点で、特別な影響力をもった人物であると評価した。すなわち、本書はイクバルを現代イスラーム世界の中に位置づけようとするものであり、イクバル自身が、当時のイスラーム世界の「筈」のように響いてくることを示した。このように、南アジアの政治環境のみならず、イスラーム世界全体の中でイクバルを捉えようとした点が本書の特徴で

あり、イスラーム研究の一環としてイクバルを捉えなおす力作である。

Farmān Fathpūrī, 1978, *Iqbāl Sab ke lie*. Karachi: Urdu Academy Sindh. (AQEEL||D||111||40)

イクバルに関する研究書は膨大な数に上るが、1978年に発表された本書は、その中でも古典的な研究書、基本文献と評価されている。本書にはイクバルの生涯、思想、関連文献、政治活動などイクバルに関するあらゆる側面について議論がなされている。13章は、イクバルの家庭環境、生涯と人物と著作、自我の哲学、教育思想、政治思想とパキスタン運動、イスラーム世界とイクバル、イクバルの詩作における芸術性、イクバルの恋愛観、東洋と西洋に対する見解、ウルドゥー詩、ペルシア詩、イクバルと新世代、文学界におけるイクバルなどについて考察がなされている。本書は、イクバルの評価をきわめて客観的に行っている点で評価される。すなわち、パキスタンにおいては、しばしば、イスラーム急進派がイクバルの思想を拡大解釈して利用したり、あるいはイクバルの思想を批判する目的で著作が書かれるといった動きがあり、本書はこのような思想的偏りに陥ることなく、書名にある通り、『みんなのためのイクバル』として、誰もがイクバルの人物と詩作に先入観なく触れることができるようになっている。イクバルを学ぶ上での基本文献の一つである。

Muḥammad Āṣif, 2009, *Islāmī aur Maghribī Tahdhīb kī Kashmakash: Fikr-e Iqbāl ke Tanāzur meṅ*. Multan: Bahā al-Dīn Zakariyā University. (AQEEL||D||101||58)

著者は文化の比較研究、文化間の衝突や理解が現代の最も重要な課題であると認識し、イスラーム世界が重要な岐路に立っていることに疑いがないと考えている。西洋とイスラームとの新たな関係構築、イスラーム自体のあるべき立場の模索は、困難を伴いながらも直面すべき課題であり、その課題に対する答えの鍵がイクバルの思想にあると力説する。すなわち、異なる文化、宗教がハーモニーをもって相互理解を行う事こそが、現代世界の問題解決につながるものであり、イクバルの思想の中にはこうした主張が示されている。本書は、『文明の衝突』や『歴史の終わり』への答として書かれたもので、現代世界の様々な課題という広いテーマの中でイクバルの思想を扱った点に特徴を持つ。

Shaiḫ Akbar ‘Alī, 1966, *Iqbāl Is kī Shā‘irī aur Pehām*. Lahore: Kamāl Publishers. (AQEEL||D||101||19)

著者は弁護士で、1932年に本書を英語で記した。そして著者自身がウルドゥー語に訳したものが本書である。最初の4章は1932年の初版までに書かれたもので、残りの8章はイクバルの没(1938年)後に書かれた。ウルドゥー語版は1946年にラーホールのイスラーム擁護協会から刊行された。本書はイクバルの生存中に発表された数少ない研究書であり、著者自身がイクバルと交流を持っていた。本書ではイクバルの思想、芸術観、スーフィズム、国家観、自我哲学、イクバルの思想の変遷、詩作における隠喩等について書かれており、再版でありながら、現在では入手が困難な書籍となっている。

Hāshimī, Rafī‘ al-Dīn, 1977, *Kitābiyāt-e Iqbāl*. Lahore: Iqbal Academy Pakistan. (AQEEL||D||106||19)

本書はイクバルの生誕100年を記念して1977年に刊行された。雑誌論文、修士、博士論文、未刊行の研究論文などを網羅した解題で、6つの章に分けられている。すなわち、イクバルの著作、翻訳、詩作の注釈書、イクバルに関する研究書、雑誌等のイクバル特集号、未刊行の論文

であり、海外の著作も可能な限り収載している。書誌データと共に解説が付されており、イクバル研究における先行研究を知る上で貴重な資料となっている。著者はパンジャブ大学オリエンタル・カレッジウルドゥー文学研究科で長年イクバル学を教授したのち、同カレッジのイクバル研究特別教員として現在もイクバル研究に関する著作を発表している。

Waḥīd Qureshī, 1996, *Asāsīyāt-e Iqbāl*. Lahore: Iqbal Academy Pakistan. (AQEEL||D||113||20)

パンジャブ大学オリエンタル・カレッジのウルドゥー文学研究科長を歴任したワヒード・クレイシー教授によるイクバルに関する研究論文集。イクバルの教育思想、歴史観、政治思想、詩想、芸術観などについて論じている。領土的ナショナリズムやジハードに対する考え、画家アブドゥッラフマン・チュグターイーとの交流、ペルシア語の重要性、ホメイニーやアリー・シャアティーとイクバルとの比較、現代政治、民主主義体制、選挙制度等、数多くのテーマに基づいてイクバルを論じている。

Tabassum Kāshmirī, 1977, *Iqbāl aur Na'ī Qawmī Thaqāfat*. Lahore: Maktaba-e 'Āliya. (AQEEL||D||102||21)

本書は、イクバル研究の中で、イクバル自身が、のちにパキスタンとなるインド西北部の文化の発展に寄与していたことを指摘し、このことが、パキスタン独立後、イクバルの思想や詩想が、パキスタンという新興国家にとっての新たな国民文化としての地位を確立したと結論付けた。イクバルはパキスタンの国民的詩人との評価を受けているが、イクバル自身はムスリムによる単一独立国家の成立を目指していたわけではなく、またパキスタン独立の9年前に没していたが、パキスタンでは常にイクバルが研究対象となっており、まさに「国民文化」の象徴としての地位を得ている。こうした現象から国民文化について論じた論考はこれまでになかったものであり、イクバル研究をとおした国民文化論という新たな視点を提示した著作である。著者のタバススム・カーシュミーリー博士は1981年から23年間大阪外国語大学で客員教授としてウルドゥー語教育に携わり、『ウルドゥー文学の歴史』の著者として広く知られる研究者である。

Shāhid Iqbāl Kāmran, 2009, *Iqbāl Dostī*. Islamabad: Pūrab Academy. (AQEEL||D||119||12)

イスラマバードのアッラーマ・イクバル公開大学のイクバル学研究科長のシャーヒド・イクバル・カームランによるイクバル研究に関する10論文から構成された著作。本書に収録された論文には、イジュティハードに対する見解、イスラーム的民主国家のあり方、スーフイズム、1930年のアラーハーバードでのムスリム連盟年次大会における演説、イスラーム世界の政治的団結、社会主義、イスラーム文化など様々なテーマを通してイクバルを論じている。また、イクバルのペルシア詩、ウルドゥー詩の注釈に関する研究も行っている。著者はパキスタン社会におけるイスラーム復興の極端な動きに対し批判的な主張の中でイクバルを解釈しようとし、パキスタン社会がこうした頑迷な宗教復興の軛から解放されるべきであると主張する。そのため、イクバルの思想を宗教復興の先駆的思想と位置づけるのではなく、書名『イクバルへの親しみ』のとおり、イクバルを宗教的文脈から離れて読むことを求めている。こうした著作はパキスタン社会であまり多く発表されないが、このような視点からのイクバル研究の存在自体が重要な意義を持っている。

Abu Sa'īd Nūr al-Dīn, 1959, *Islāmī Taṣawwuf aur Iqbāl*. Karachi: Iqbal Academy. (AQEEL||D||111||36)

本書は、カラチー大学に提出された博士論文をもとにしたもので、カラチー大学が創設されて初めての学位論文である。本書の構成は2つに分かれており、第1章はスーフイズムの定義、歴史の変遷と発展について分析されており、第2章ではイクバルがスーフイズムから受けた影響について議論されており、プラトン哲学やベルシアの詩人ハーフィズに関するイクバルの見解、イクバルにみられるスーフイズムの特徴としての自我、イクバルが掲げる「完全な人間」とスーフイズムの関係等、スーフイズムの諸側面からイクバルの詩想や詩作を検討している。本書は学位論文が刊行されたこともあって、その後のイクバル研究においては常に参照される著作であり、イクバルとスーフイズムの関係について第一級の研究書である。著者は1929年に現バングラデシュに生まれ、パキスタン独立後カラチーに移住し、カラチーのイクバル・アカデミーで活躍した。彼は、東パキスタン(当時)の出身者で、イクバル学について学位を得た点で、パキスタンの学界でも注目された。本書はその初版で、現在は入手が困難である。

‘Abd al-Mughnī, 1985, *Iqbāl kā Nizām-e Fan*. New Delhi: Urdu Book Foundation. (AQEEL||D||103||38)

本書の著者は触れていないが、本書が刊行された背景には、著名なインドの現代ウルドゥー文学批評家のカリームッディーン・アフマドの著作『イクバル——一研究 *Iqbāl Ek Muṭāl'a*』(1979, (AQEEL||D||102||3)) に対し、本書の著者が『イクバルと世界文学 *Iqbāl aur 'Ālmī Adab*』を書いた経緯があり、本書もその流れの中で書かれたものである。カリームッディーン・アフマドがイクバルを詩人として高い評価を与えなかったのに対し、本書の著者アブドゥル＝ムグニーはイクバルを世界文学の中でも最高のレベルの詩人であると位置づけた。本書はそれを議論するために書かれた著作である。著者によると、イクバルの詩作には、文学的技法と思想が見事に統一された要素が見られることを指摘した。一般にイクバルの詩の技法に関する研究の場合、長編詩やいくつかの詩をもとに議論されるが、本書ではすべての詩作を考察することで、その技法の高さを論じることで、その詩想についても議論することで、世界文学の中での高い位置づけをもたらしている。

Aslūb Aḥmad Anṣārī, 1977, *Iqbāl kī Terā Nazm*. Lahore: Majlis Taraqqī Adab. (AQEEL||D||107||21)

本書は、イクバルの13の詩に関する研究書である。「孤独」「燈明と詩人」「イスラームの曙」「亡き母の思い出」「酌人の書」「コルドバのモスク」などが収められている。著者は、イクバル研究について、イクバルの思想研究が中心となっており、詩作としての情緒的な部分についての研究がなされていない点を批判し、この部分に光を当てようとしている。その結果、彼の創造性が思想をいかに詩作に閉じ込め、詩のリズム感が全体のイメージをいかに構築しているかについて論じている。本論は、イクバルの詩作を美学的観点から論じたもので、本書はイクバルのみならず、ウルドゥー詩の芸術性について学ぶ者にとっての必読書である。

Kalīm al-Dīn Aḥmad, 1979, *Iqbāl Ek Muṭāl'a*. Crescent Cooperative Publishing Society. (AQEEL||D||102||3)

本書の著者カリームッディーン・アフマドは、20世紀半ばのインドを代表するウルドゥー文学研究家で、彼の主張は、イクバル研究がイクバルに預言者のような地位を与えているものの、詩人としてのイクバル研究がなされていないというものである。彼のイクバルの詩作に対する評価は一般的なものと異なり、イクバルの詩作は、世界文学と異なり、自らの思想を強調するあまり、文学性、詩的な美しさが後景化してしまっていると指摘している。カリームッディーンによれば、イクバルは預言者的な立場を取らなければ、優れた詩人として評価でき、この「預言者性」

が彼の詩作のレベルを低くしていると断じている。本書は、数あるイクバル研究の書籍の中で、イクバルの詩の評価で否定的な論を展開した珍しいものであり、この点で貴重な図書である。

Tabassum Kāshmirī (ed.), 1977, *Iqbāl, Taṣawwuf, Qawmīyat aur Pākistān*. Lahore: Maktaba-e ‘Āliya. (AQEEL|D|114|37)

本書は3章に分けられた、ウルドゥー文学研究者14名によるイクバル研究論文を集めたものである。第1章には「国民性 qawmīyat の概念」のもと3本の論文が掲載されている。サイド・アブドゥッラーの「イクバルと国民性」、イナムル・ハク・コーサルの「国民性とイクバル」、ムハンマド・ウスマーンの「国民はいかにして作られるか」がそれぞれである。続く第2章は「パキスタンの概念」で、アブドゥッサラーム・フルシードの「イクバルとパキスタン」、アブドゥル・ハミード・カマーリーの「ジンナー、イクバルとパキスタンの概念」、サイド・アリー・アッバースの「ジンナー宛のイクバルの書簡の背景」、サリーム・アフタルの「イクバルとパキスタン構想」、ハニーフ・シャーヒドの「イクバルのアラーハーバード演説」、ヒダーヤトゥッラー・チョウドリーの「偉大な指導者ジンナー、イクバルとパキスタン運動」、ウズラー・スルターナの「イクバルのパキスタンの概念」の7論文が主催されている。第3章の「今日のパキスタン」には、ワヒード・クレイシーの「パキスタンにおける国民性の形成」、ムハンマド・ウスマーンの「パキスタンの再建とイクバル」、ヤヒヤー・アムジャドの「イクバルとパキスタンの現在の文化的問題」、ラシード・アフマド・ハーンの「イクバル、パキスタンとイスラーム諸国の類似性」の4本が収められている。さらに、イクバルの国民性の概念とパキスタンに関する全体的な議論がなされている。1977年までイクバルの国民性に関する概念と現代パキスタンを議論する論文はあまりなかったが、本書はその学問上の不足を補うものである。パキスタンという新生国家の概念を確定する上で、イクバルの思想がいかなる位置を占めているか、そしてその新生国家の中で生まれる国民文化や国家統合の問題についての議論がなされており、現在もなお示唆に富む書籍である。

Rafī‘ al-Dīn Hāshmi, 2010, *‘Allāma Iqbāl: Shakhṣīyat aur Fikr o Fan*. Lahore: Iqbal Academy Pakistan. (AQEEL|D|21|6)

本書は、タイトルにある通り、イクバルの人物像と思想、文学的技巧に関する研究書である。イクバルの生涯の時代的変遷、思想や詩作の展開、政治的、社会的、文化的な貢献、詩作の編纂、著作の刊行など、イクバルのあらゆる側面を詳細に論じている。イクバルの生涯に関しては、先行研究や著作で紹介されてこなかった出来事を紹介し、その事実関係を考察している。イクバル研究で同様の研究書は数多く出版されているが、本書は新たに見つかった資料等を駆使して、イクバルの新たな側面を浮き彫りにしたものである。本書は24章に分けられているが、各章のタイトルはイクバルの詩句の中から選ばれている。本書の著者ラフィーウッド・ハーシューミー博士はイクバル研究の第一人者であり、本書はこれまでのイクバル研究の成果をまとめあげた著作と評価できる。イクバルを理解する上での基本文献として重要である。

Jāved Iqbāl, 1996, *Ma’e Lāla Fam*. Lahore: Iqbal Academy Pakistan. (AQEEL|D|101|34)

本書はイクバルの息子であるジャーヴェード・イクバル(2015没)による、イクバルに関する論文27本を集めたものである。その多くは1957年から1972年の間に、イクバル記念日の際に発表されたものである。これらの論考は、「生きているイクバル zinda Iqbāl」をいかにパキス

タンの人々に提示するかという点を念頭に置いて書かれたものである。著者の言う「生きているイクバル」とは、イクバルの研究が、彼の詩作や思想のみの枠組みで研究されることなく、現代のパキスタン社会と密接に関連させることにより、イクバルとその思想が今もパキスタン社会の中で生きていることを意図している。著者はイクバルの息子としてイクバルに接し、また長じて裁判官となり、国際情勢等にも精通したことから、これら論文の発表された時代の国際情勢やパキスタンにとっての東パキスタン独立などの厳しい時代を俯瞰しながら、パキスタンの政治経済、社会について厳しい考察を展開している。また現代のイスラーム世界におけるリベラリズムの運動とイクバルの関係、イクバルの思想を通してみた現代パキスタンの政治状況、パキスタンの国家主義と国際的イスラームの連帯、イクバルとイスラーム国家、イクバルと国家の役割、イクバルの時代におけるムスリム政治団体、イクバルの経済思想など、さまざまな分野、視点からイクバルの思想を明らかにしている。これらの論文は、イクバルの息子であるがゆえの繊細な発想に裏付けられたものともいえるもので、イクバル研究にとって重要である。

Jāved Iqbāl, 2008, *Khuḡbāt-e Iqbāl: Taḡhīl o Tafhīm*. Lahore: Sang-e Meel Publications. (AQEEL||D||103||78)

かつてイクバルは、「イスラーム思想の現代的構築」という主題で演説を行った。うち6本はマドラーズ・ムスリム協会の招待で1929年にマドラーズ、アリーガル、ハイダラーバード、マイソール等で発表されたもので、1本は1933年にロンドンのアリストテレス協会の招待で発表したものである。本書は上記7本の演説原稿からなるもので、その内容は難解ながら、これら演説の理解なしにはイクバルの思想の理解は不可能であろう。本書を編纂したジャーヴェード・イクバルはイクバルの実子であり、これはジャーヴェード・イクバル氏の父イクバルに関する思いをまとめたものであるともいえる。編者はイクバルの各演説の前に、その演説の概要と思想的特徴を付し、それぞれの演説に対して起こった批判等に関する考察も展開している。こうした議論の末に、各演説に対する編者の見解を述べる体裁をとっている。本書は、イクバルの演説を研究する上で基本文献であり、この分野に関しては、本書以上の著作はないといえる。

アキール文庫のイクバル学コレクションについて

正誤表

p. 152, l. 19	AQEEL D 104 14	→	AQEEL A 806 10
p. 153, l. 8	AQEEL B 901 207	→	AQEEL B 901 27
p. 154, l. 3	AQEEL D 106 41	→	AQEEL D 106 38
p. 154, l. 32	AQEEL D 106 20	→	AQEEL D 106 17
p. 157, l. 29	AQEEL D 121 37	→	AQEEL D 101 37
p. 158, l. 35	AQEEL D 111 40	→	AQEEL D 109 18
p. 160, l. 16	AQEEL D 101 58	→	AQEEL D 206 33, AQEEL D 121 22
p. 163, l. 3	<i>Taşawwuf</i>	→	<i>Taşawwur</i>
p. 163, l. 24	AQEEL D 21 6		AQEEL D 121 16